

Bose ShowMatch DeltaQ array loudspeakers

導入レポート:尚美学園大学

取材協力: 学校法人尚美学園 尚美学園大学、ボーズ合同会社

「Bose」独自の『DeltaQ Array technology』により、従来のアレイ・スピーカーでは難しかった水平垂直の正確な指向性コントロールと、極めてナチュラルな音質を実現したスピーカー・システム「ShowMatch」。一般にツアーリング用スピーカーとして認知されている「ShowMatch」だが、そのコンパクトさが評価され、設備用スピーカーとして導入されるケースも多い。埼玉県川越市の私立大学、尚美学園大学も「ShowMatch」を導入した法人の一つで、今年6月から3/2対向のシステムを音響コースの授業で使用するための準備をしている。同大学の芸術情報学部で准教授として教鞭を執るエンジニアの山寺紀康氏に、「ShowMatch」を導入した理由とその使用感について話を伺ってみた。

埼玉県川越市の4年制大学 尚美学園大学

PS 山寺さんは昨年の春から、尚美学園大学で准教授として教鞭を執られているそうですね。

山寺 そうです。一昨年、お誘いいただきました。これまで学校で教えたりした経験はまったく無かったのですが、チャンスがあれば若い人たちに自分のPAの方法論を伝えたいと思っていたので、せっかく機会をいただいたのだからやらせていただくことにしました。最初は自

分に務まるのかなと、かなり不安でしたけどね。

PS 山寺さんが所属する芸術情報学部情報表現学科について、簡単にご紹介いただけますか。

山寺 芸術情報学部には、楽器演奏や作曲などを学ぶ音楽表現学科、音楽ビジネスと音楽メディアについて学ぶ音楽応用学科、ダンス、演劇、ミュージカルについて学ぶ舞台表現学科と、私が所属する情報表現学科の合計4つの学科があります。情報表現学科では、音響、映像、照明、美術、デザイン、CG、イラスト、

アニメ、ゲーム、ゲームサウンド、情報、アプリ、SNSなど、幅広いフィールドについて学び、ドラマ制作や映像制作など実践的な授業も行なっています。私が担当しているのはその中の音響で、現役でライブのPAをしている人間が教鞭を執るのは私が初めてだったようです。

PS 授業はどのような内容になるのですか。

山寺 学年によっても違いますが、基本的なところから教えています。ケーブルの巻き方やマイクスタンドの立て方、マイクの扱いなどです。そしてアナログ卓

を扱います。カリキュラムもすべて私が自分で作ったんですが、それはかなり苦労しました。授業は週に6回、それぞれが15コマあるので、どのような内容にすればいいか頭を悩ませました。体験談や、ゲストを招いての授業をしたりもしていますが、まだまだ試行錯誤している段階です。

私が学生に伝えたいのは、機械ではなく人を見て仕事をしてほしいということ。手元の卓ではなく、ステージの演者さんの方を向いてミックスしてほしいと思います。エンジニアというのは、何かあったらすぐにステージまで走って行ける人であってほしいと思っています。機材のセッティングやバラしなども、言われたことだけをやって止まってしまうのではなく、想像力を働かせて次に何をすればいいかを考えるようになってくれるといいですね。音響の仕事も飲食業と変わらないサービス業であるということは常に言っていますね。

PS 学生の多くは、将来音響の仕事に就きたいと考えているのですか？

山寺 そうですね。その背景には、昨今のライブ人気があるのではないかと思います。最近のライブは、プロジェクションマッピングを使ったり、エンターテインメントとして凄く進化していると思います。音も昔と比べれば格段に良くなりましたね。実際にそういうライブを体



尚美学園大学 芸術情報学部 情報表現学科 准教授の山寺紀康氏。これまで久保田利伸やスピッツ、横原敬之といったアーティストを手がけてきたトップ・エンジニアの一人。一昨年、大学側から招聘され、准教授として教鞭を執っている



昨年導入されたというミキシング・コンソール「ヤマハ QL5」。常設ではなく、使用するときに持ち込まれる

験して、自分もそういった関係の仕事に就きたいという人が増えているのではないかと思います。なので授業も人気で、1年次に行く音響の基礎実技は受講希望者が100名以上いて、抽選で選ばせてもらったくらいです。ただ、授業を受けながらも、自分は音響と舞台演出のどちらをやりたいのか、迷っている人が多い感じですね。これは情報表現学科の特徴でもあるんですが、学生は各専攻を自由に行き来することができるんです。1年目で音響を選んで、授業を受けて自分に合わないと思えば、2年目からは映像の方に進むこともできるんですよ。

PS 音響の授業はどこで行われるんですか？

山寺 まだ専用のスペースが得られていないので、実技は主に録音スタジオで、演劇のシアターやクラシックのコンサートホールもお借りして使用しています。もちろん、座学もあるので、普通の教室

で授業を行うこともありますね。ミキシング・コンソールはアナログ卓と「ヤマハ」の「M7CL」があったんですが、昨年「QL5」と「QL1」を導入しました。余裕があれば、他のメーカーの卓も入りたいと思っています。実際の現場でよく使われているコンソールを触



今年6月導入された「Bose ShowMatch」。こちらも常設ではなく、音響の授業のときに持ち込んで使用される

る機会が与えられればと思っています。

音響の授業用に ShowMatchを導入

PS そして今年6月、音響の授業で使用する新しいスピーカーとして「Bose」の「ShowMatch」を導入されたとのことですが、これは山寺さんが選定されたのですか？

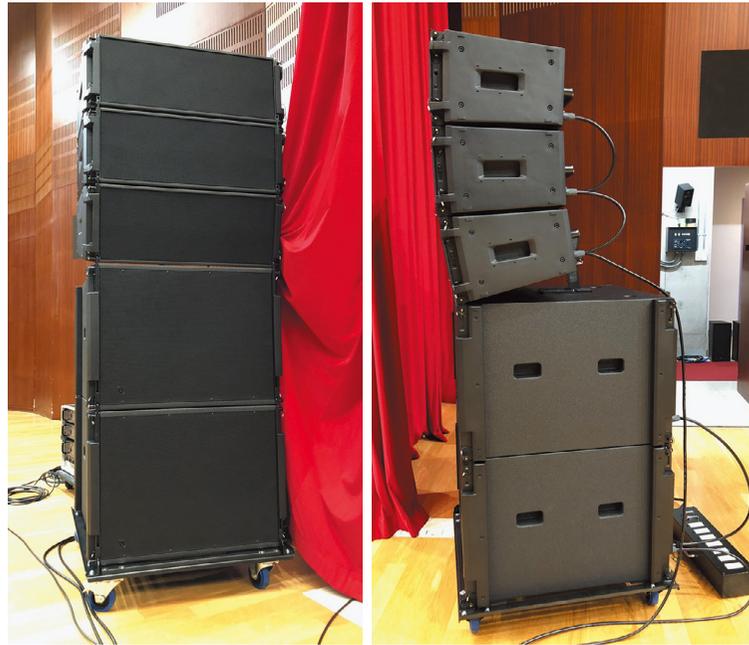
山寺 そうです。パワードのワンボックス・タイプのスピーカーが多く、今の時代PAを教えるのにラインアレイがあった方がいいのではないかとということで、大学側をお願いして導入してもらいました。

PS いろいろ選択肢はあったと思うのですが、「ShowMatch」を選定された理由をおしえてください。

山寺 現場で使ったことはなかったんですが、『Inter BEE』や「Bose」さんが行っている試聴会で何度か聴かせてもらって、凄く良いなと思っていたんです。「Bose」は「ボーカル・クラリティー」、歌の明瞭度の高さを一番のセールスポイントとして打ち出していますが、その喧



尚美学園大学の川越キャンパス内にあるコンサート・ホール、「尚美パストラルホール」。主にオーケストラなどの実習で使用される



「尚美パストラルホール」に設置された「ShowMatch」。取材でお邪魔したときは夏休み後の本格運用に向け、チューニングの真っ最中だった

伝に偽りのない音だなど。同時にとても素直な音だなど思いました。作り込まれた感じがしないというか。

「ShowMatch」の開発を手がけられた持丸さん(編註:「Bose」本社プロ・オーディオ部門のゼネラル・マネージャー、持丸聡氏)って、元々「Altec」でスピーカーを作っていたとお聞きしました。私が昔所属していた会社も「Altec」を使っていて、当時はそんな会社は珍しかったんですけど(笑)、あのスピーカーにはこだわりがあったんですね。なぜ「Altec」にこだわっていたかと言うと、ボーカルが一番きれいに聴こえるスピーカーだったからなんです。中低域が豊かと言えばいいんですかね。物量は必要になりますが、たくさ

イントになりましたか。

山寺 そうですね。私が学生に伝えたいのは、技術的なことだけでなく、ステージ上の音楽をいかにそのまま伝えるかという気持ちです。なのでできるだけアウトプットが素直なスピーカーがいいなと思っていました。学生にはいつも言っているんですが、できるだけ白いキャンバスを作って、そこをアーティストの色で染めるというのがPAの仕事だと考えています。真っさらなキャンバスに、赤だったら赤、緑だったら緑とアーティストの色に染めることができたら、PAの仕事は成功。それをやるには、アウトプットが素直なスピーカーが望ましいと考えています。

ん積みば音がしっかりと“面”になりますし……。だから持丸さんが元「Altec」ということを知って、凄く納得がいったんですよ。

PS 現場ではなく、学校の授業で使うということも選定のボ



「ShowMatch」は、片側「SM5」が2本、「SM10」が1本、サブ・ウーファの「SMS118」が2本の3/2対向の構成



パワー・アンプは「Powersoft X4」。標準で「ShowMatch」のプロファイルが搭載されている

PS 導入された「ShowMatch」のシステム構成をおしえてください。

山寺 片側「SM5」が2本、「SM10」が1本、サブ・ウーファの「SMS118」が2本の3/2対向のシステムです。「Bose」さんに相談して決めたんですが、「ShowMatch」としてはミニマムなシステムですね。大学のホールもクラシック用のそれほど大きいホールではないので、まずはこの数量からかなと。最初は屋外で使うことを考えて、4/2対向のシステムも検討したんですが、そうするとアンプも増やさなければならぬですし、電源の問題もあるので、とりあえず3/2対向のシステムを導入しました。

PS アンプに関しては?

山寺 これも「Bose」さんに相談して、「Powersoft」の「X4」を導入しました。純正の「PowerMatch」ですと、3/2対向のシステムを組む場合2台必要になるんですが、「X4」ならば1台で済みますし、「ShowMatch」のプロファイルもあらかじめ用意されていますから。アンプのコントロール・ソフトウェア「Armonia Plus」は、最先端のDSPを搭載しているのもポイントで、これだけでライブPAに必要なプロセッシングはすべてできます。「rational acoustics Smaart」とも連携できますし、学生が今のPAを知る教材としてもいいんじゃないかと思いました。

ノーEQで使用しても耳に痛くないスピーカー

PS 今日ホールでチューニン



コンサート・ホール「尚美パストラルホール」



客席に置かれた練習用グランドピアノと「ShowMatch」

グされていましたが、あらためて「ShowMatch」のサウンドはいかがですか。

山寺 ずっとノーEQで出していたんですけど、本当に耳に痛くないスピーカーですよ。私がスピーカーをチューニングするときは、低域に関しては“漂う帯域”なのでキチッとポイントを探り、高域に関してはグラフィックEQを使って少しスピードを落とすことがあります。最近は高域のスピードが早いスピーカーが多いので、でも「ShowMatch」は、そういう処理が必要ありませんでした。それとボーカル・クラリティーの良さとか、クロスオーバーの違和感の無さをあらためて感じました。「Bose」さんによると、クロスオーバー・ポイントが750Hzと低めなんですよね。

PS カバーエリアのコントロール性能に関してはどうですか。

山寺 今日はかなり音圧を出したんですけど、あれだけ出しても反射音をほとんど感じませんでした。普通だったらプロセッシングで補正するところをスピーカーの構造でクリアしているんですね。今の時代、アウトプット・プロセッサーは不可欠ですけど、スピーカーだけである程度のところまで持ってい

けるならそっちの方がいいに決まっていますからね。塩をかけずに美味しい野菜だったら、そっちの方が絶対にいいわけですから(笑)。

PS 学生の反応はいかがですか?

山寺 6月に導入したばかりで、夏休み明けから本格的に運用するんですが、よくある他のメーカーではなく「Bose」のラインアレイということは意外だったようです。「Bose」と言うとヘッドフォンとかそういうイメージを持っているようで。

PS 山寺さん自身も、「ShowMatch」によって「Bose」に対するイメージが変わったというのがありますか?

山寺 最初は「ShowMatch」ではなく、ノイズ・キャンセリング・ヘッドフォンの「QuietComfort」でビックリしたんですよ。民生用ヘッドフォンなのに、こんなに音が良いのかと。それまでは「802」や「101」のイメージだったのですが、「QuietComfort」であらためて「Bose」という会社に興味を持って。その後、2ボックス・タイプのスピーカーをいろいろ比較する機会があったのですが、その中に「F1」が入っていて、もうピカイチで良かったんです。他のスピーカーもそれぞれ色々な特色や工夫があったのですが、「F1」だけはローの質感というか、品の良さがまるで違って。これは凄いなとすぐに自分で買っ

てしまいました(笑)。「F1」ならば自分が出したい音をすぐに出すことができる。授業の声のPAなども「F1」を使ったりしています。そんな感じで、最近は何か音響機器が必要というときは、まずは「Bose」製品をチェックするようになってしまいました(笑)。家で音楽を聴くにも、「Acoustic Wave」を愛用していますよ。

PS 今後、大学ではなく現場で「ShowMatch」を使用される予定がありますか?

山寺 具体的なプランは無いのですが、いずれは使ってみたいですね。それほど大きくないハコで、フライングで使ってみたいなと思っているんです。今度、とあるツアーで実験的に「L1」をステージ内で使う予定です。「L1」を何本か使っていて、LRだけではなく空間を埋めるということをやってみたくて。音が一つの面になったかのような空間を作り、それをお客さんと共有できたら理想的なんじゃないかと思っています。そういうことをやる上でも、「Bose」の製品は使いやすいですね。

PS 本日はお忙しい中、ありがとうございました。

Bose 製品に関するお問い合わせ:
ボーズ合同会社
Tel: 03-5114-2750
http://probose.jp/



「ShowMatch」と山寺氏